

2025 年度名古屋造形大学
総合型選抜・専願 / 【1 期】外国人入学者選抜

視覚表現領域 問題文

<物語の文章>

作品名：みつばちの 女王

著者名：グリム ヤーコプ・ルートヴィッヒ・カール / グリム ヴィルヘルム・カール

訳：矢崎 源九郎

むかし むかしのことです。ふたりの^{おうじ}王子が、ぼうけんのたびに でかけました。
ところが、^{おうじ}王子たちは、すきかってなくらしを はじめてしまって、^{いえ}家へかえろうとはしませんでした。
そこで、おばかさん という^{なまえ}名前の、いちばん下のおとうとが、^{にい}兄さんたちをさがしにでかけました。お
ばかさんは、やっとのことで ^{にい}兄さんたちをみつけました。
ところが、^{にい}兄さんたちは、おとうとをばかにして、
「おまえみたいなまぬけが、世の中でくらしていくのは たいへんなことだぞ。おれたちは、おまえよりも
ずっと りこうだが、そのおれたちでさえ、うまく やっていくことが できないんだからなあ。」と、いい
ました。
それから、三人で そろって でかけました。
やがて、ありの^{ところ}とうの あるところへ、やってきました。
「どうだい、この ありの^{ところ}とうを、ほじくりかえしてやろうじゃないか。そうすりゃ、ちっちゃい ありの
やつらは、びっくりして、はいまわったり、たまごをはこびだしたりするぞ。そいつをけんぶつしてやろう
ぜ。」と、^{にい}兄さんたちがいいました。
ところが、おばかさんはいいました。
「生きものは、そっと しておいてやってよ。^{にい}兄さんたちが、ありをいじめたりするのを、ぼく みちやい
られないよ。」
それから、三人は、また さきへあるいていきました。やがて、みずうみにでました。みると、みずうみ
には、それはそれは たくさんのかもがおよいでいます。
「ようし、あいつらを二、三^ば羽 つかまえて、やき^{とり}鳥にしてやろう。」
と、^{にい}兄さんたちが、また いいだしました。
けれども、おばかさんは しょうちしません。
「生きものは、そっと しておいてやってよ。^{にい}兄さんたちが かもをころすのを、ぼく みちやいられない
よ。」と、いいました。
とうとう 三人は、みつばちの^す巣のあるところへ、やってきました。みれば、^す巣のなかには みつがいっ
ぱいあって、それが、木のみきをつたわって ながれています。

「そうだ、あの木の下で 火をたこう。そうすりゃ、はちのやつは、いきがつまって 死んでしまうから、みつがとれるぞ。」

と、兄さんたちは、しきりに いいました。

けれども、おばかさんが、またまた 兄さんたちをとめて、いいました。

「生きものは、そっと しておいてやってよ。兄さんたちが、はちをやきころしたりするのを、ぼく みちやいられないよ。」

とうとう しまい、三人のきょうだいは、知らないおしろへ やってきました。

ところが、このおしろには、馬やにも 石の馬しかおりません。それに、人間のすがたも、どこにもみえないのです。

三人は、広間を、つきつぎと とおりぬけて、いちばんおくの とびらのまえにきました。とびらには、じょうが三つ さがっていました。とびらのまんなかには、小さなよろい戸があつて、そのよろい戸から、へやのなかがみえました。

みると、灰いろの小人がひとり、テーブルについています。

三人は、小人をよんでみました。一ど、二ど。でも、小人にはきこえません。もう一ぺん、よんでみました。すると ようやく、小人はたちあがつて、じょうをあけて できました。

しかし、小人は、ひとことも 口をききません。だまって 三人を、ごちそうのたくさんならんでいるテーブルのところへ、つれていきました。三人は、たべたりのんだりしました。

すると 小人は、こんどは、ひとりずつ、べつべつのしんしつに つれていきました。

あくる朝、灰いろの小人が、いちばん上の王子のところへ やってきました。小人は手まねきして、王子を、石の板のあるところへ つれていきました。

その石の板には、三つのもんだいがかいてありました。そのもんだいを うまくとくと、このおしろにかかっているまほうが、とけることになっていたのです。

さて、一ばんめのもんだいは、

「森のなかのこけの下に、王さまのおひめさまのしんじゅが、かくしてある。それをさがしだしなさい。ただし、お日さまがしずむときになって、まだ、ひとつぶでもたらなければ、それをさがしたものは石になってしまう。」と、いうのでした。

いちばん上の王子は、森にでかけていって、一日じゅう さがしました。けれども、日がしずむときまでに みつけたのは、たった ひとつぶきりでした。そのため、石の板に かいてあったとおり、王子は石にされてしまいました。

あくる日には、二ばんめの兄さんが、このぼうけんをやってみました。

けれども、この兄さんも、いちばん上の兄さんより、そんなに うまくやることはできませんでした。一日かかって みつけたしんじゅは、二 ひとつぶだけだったのです。それで、この兄さんも 石にされてしまいました。

いよいよ、おばかさんの番です。おばかさんは、こけのなかをさがしました。しかし、しんじゅをみつけるのは、とてもとても むずかしい仕事です。なかなか、おもうようにはいきません。とうとう おばかさんは、石にこしかけて なきだしました。

こうして、なきながら すわっていると、まえに、おばかさんが いのちをたすけてやった ありの王さまが、ありを五千びきもつれて、やってきました。この小さなありたちは、しばらくするうちに、みんなで しんじゅをみつけだして、その場へ 山のようにつみあげてくれました。

これで、おばかさんは、だいいのもんだいをときました。

そのつぎのもんだい というのは、

「王さまのおひめさまの しんしつのかぎを、^{うみ}海のなかからとってきなさい。」

と、いうことでした。

おばかさんが ^{うみ}海へいきますと、まえに、いのちをたすけてやったかもが、いく^わ羽もいく^わ羽も およいできました。かもたちは ^{みず}水のなかへもぐって行って、^{うみ}海のそこから、かぎをとってきてくれました。

さいごにのこったもんだいが、いちばん むずかしいもんだいでした。

「ねむっている三人のおひめさまのなかから、いちばん下の、いちばん かわいいおひめさまを、さがしなさい。」と、いうのです。

ところが、このおひめさまたちは、なにからなにまで そっくりなのです。ただ、ちがっているところは、ねるまえに、めいめいが、べつべつの あまいものをたべる、ということでした。

いちばん上のおひめさまは、おさとうをひとかたまり たべます。そのつぎのおひめさまは、シロップをすこしばかり たべます。そして、いちばん下のおひめさまは、はちみつをさじに一ぱい たべるのです。

さて、そこへ、まえに、やきころされそうに なっているところを、おばかさんにたすけてもらった、みつばちの^{じょおう}女王がとんできました。みつばちの^{じょおう}女王は、三にんのおひめさまたちの口を、つぎつぎと なめてみました。

いちばんさいごに、はちみつをたべた口の上にとまると、そのまま、じっと していました。それで、^{おうじ}王子には、その人が、じぶんのさがしている おひめさまだということが、わかりました。

これで、まほうはとけたのです。いろいろなものが、みんな ながいながい ねむりから さめました。石にされていたのは、もとの^{にんげん}人間のすがたに もどりました。

おばかさんは、いちばん下の いちばん かわいらしいおひめさまを、およめさんにもらいました。そして、おひめさまのお父さまが なくなったあとは、^{おう}王さまになりました。

それから、ふたりの^{にい}兄さんたちは、あとのふたりのねえさんを、およめさんにもらいました。